

夜士郎

挿絵○ひなつか涼

おねショタウチーズ!

あなたの魔力を注ぎなさい

立ち読み版



登場人物紹介

Characters



マリナ・ レーヴァティン

治癒と浄化の魔術に長ける学園の生徒会長。トップクラスの実力だが代々続く名家系の期待が重荷になっている。



アニー・ニルヴェナ

多岐に才能を発揮する天才兼問題児。魔術師が外法としている錬金術を得意とし周囲からはそれが原因で嫌われ気味。



ティム・ エーレンベルグ

大魔導師を目指す一見女の子のような男の子。優しい性格だが蠟燭に火も灯せない落ちこぼれ。

序章

第一章

気持ちいいとどうなっちゃうの？

第二章

エッチな研究させてねえ♥

第三章

お姉ちゃんが身体で教えてあげる♥

第四章

お姉ちゃんのエッチなダンジョン

第五章

女湯は危険がイッパイ！

第六章

お腹の中でお腹の中に

終章

「な、なんだこれっ……！　せ、せんばいの、くちにつ……!!」

未熟な性器は艶め^{なま}かしく朱い唇に隠されてしまった。口の中に——入っているのだ。肉の鞘から先っぽまで、トロトロでヌルヌルの口腔粘膜に抱きつかれているのだ。

「そ、そんなっ……!?　口に、ごはんをたべるトコロに？　な、なんで、どうしてっ）狼狽が頭を掻き回し、ティムはふるふると栗毛を振り立てる。

「んんっ！　んんんんんっ!?　ん——ッ！」

マリナもびっくりと目を見開いてなにやら呻^{うめ}いていた。

「んちゅ……ちゅる。ちゅ……フフ」

股間にすがるアニーが上目遣いでこちらを見る。真っ赤な唇がもぐもぐと蠢いて、その内側で、ペニスになにかが触れてくる。触れて——ネロネロと撫で上げてくる。

「ひゃあああんッ!?　え、え、え、な、舐め、舐め……て、ええええっ!?」

舌だ。舌で——おしっこを出す器官を、舐めている。ぞわぞわつと背筋が震えた。身体が芯からかあつと熱くなつて、頭の中にとろりとしたものが流れ込む。

「ふあっ……あ。ど、どうして、こんな、ひああ……」

「んにゅるっ……ちゅる。ちゅ、れる……。ふふ。大きくなってきたわあ……」

と、彼女は股間から口を離す。

れるお、と伸ばした真っ赤な舌の上に——ティムの肉棒が乗っていた。

大人の親指ほどの大きさには膨らんで、実に健気なペニスであった。勃起はしていても、先端まで肌色の皮に包まれていて、その中身は窺えない。

黒革の指先がペニスを摘む。「はうつ」と腰を引くティムにかまわず、彼女はそれをふるふると上下に揺さぶりながら、マリナへと見せつけた。

「どう？　これが男の子のペニス。ふふ。先っぽまで皮でガードされちゃってるわね」
「っ……………」

生徒会長は頬を桃色に染めて、その視線は未熟な性器に釘付けた。

「被っちゃってると、不衛生なのよねえ。実験に支障がでるかもしれない。だ・か・ら」
アニーの指が性器を摘む。ぞつと…………嫌な予感が背筋を撫でた。

「あ…………あの、な、なにを…………？」

「ほおら。ボクのおちんちん、剥き剥きしちゃいましょうねー」

につこりと笑って。ゆつくりと…………包皮を引きずり下ろしていくのだ。

みり…………みり…………みちみちっ！

「んああっっ！　ひ、い、たい、ふああんっ…………」

ぴりぴりっ！　と皮の裂けるような熱い痛みが背骨を駆け上がった。たまらずに腰を引くけれど、アニーの下半身に堰き止められて逃げることはできない。

「がまんがまん。ちゃんと剥けたほうが清潔でいいのよ、ボクう…………」

瑞々しく、そして痛々しいほどに。ピンク色の海綿体が、包皮の先から姿を現していく。熱く痺れるような痛み「ふああ、ふああ」と身悶える哀れな少年にかまわず、アニーは艶めかしくも容赦のない手つきでペニスの皮を剥いていく。

「はい。半分くらい剥けちゃったわよ。つやつやのおちんちん、見えてきちゃった」嬉しそうに頭を撫でてくれるアニーの目に、半ばまで皮の剥けたピンクチンポが映っている。初めて感じる外気の冷やかさにびくびくと震える、とても臆病なペニスだ。

「ん、うう……。アソコ、ムズムズするう……」

「フフ。剥いたのは初めて？　って会長サマ、ガン見しすぎじゃなあい？」

「っ！」

慌ててマリナが視線を逸らす。彼女の肌は、もう半ばまで見えていた。ローブはすでに形もなく、制服の上着は半分以上が溶けて、ピンク色の、フリルに飾られた可愛いブラが見えてしまっている。スカートも同様で、覗くショーツもお揃いのピンク色だ。

「あら、可愛いのが穿いているのね。どう、ティム君？」

「ど……どうって、言われてもっ……」

引き締まった肢体と比べてアンバランスなくらいに大きなマリナの乳房はブラからこぼれ落ちそうだ。くびれた腰から張り出したお尻も筋肉に富んで吊り上がり、そこを包み込むショーツから、すらりと形の綺麗な両脚が伸びている。

見ているだけできどきとして——目が離せない。

「き……きれい、です。とつても……」

「そうねえ。剣術で鍛えてるから、締まるところちゃんと締まっているわねえ」
羨ましい——と、そう言いながら。

「あむっ」とアニーはまた性器を口に含んだ。「ふぁあっ!？」とティムの腰がはねる。
性器を内包したその頬袋がひくつき、舌肉が動き始める。

舌先を、剥けかけの包皮と海綿体の狭間^{はざま}にあてがい。そうして舌の全体を蛇のようにのたくらせると、包皮の内側へと潜り込ませてくるのだ。

「んはっ、ふぁああっ!？」

敏感極まりない少年ペニスにヌメツとしてざらつく舌の感触は鮮烈であった。その異様な刺激に腰はたまらず浮き上がりとして、アニーが剥き出しの太股にぐっぐと力を入れて両手で抑えつける。

「にゅむにゅ……。んちゅるっ……。ちゅ、ちゅぐちゅっ……」

包皮の内側に侵入した舌肉は、そのままぐるりとなぞるように移動していく。舌が、包皮を捲り上げていくのだ。

「あああうんっ！ お、おちんちんのかわっ、剥かれてるううっ……!」
ねじゅるりと這う舌肉が包皮の鎧^はを剥いでいく。外気にすら慣れぬ繊細な海綿体を、ね

ぶりあげていく濃密な舌肉の感触に、下腹がずくずくと反応する。

やがて包皮は根本にまで押しやられて、才媛の口腔内、そのねっとりとして暖かな泥濘^{でいねい}の全てが敏感な少年を優しく包み込むのだ。

「う、あ、はああっ……こんなっ……口に、おちんちん、入れるなんてえっ……」

知らない——こんな行為は知らない。やっていいこととは思えない。

「だめえ、せ、せんばい……っ。き、汚いですよっ！ そんな、そんなことおっ」

されているのに、悪いことをしているような……奇妙な罪悪感が襲いかかる。

「ん……ちゅ。ふふ。そうねえ……」

アニーの尻尾が笑みを浮かべて、舌肉がねろりつと敏感肉を舐め上げた。

「じゅばあ。根本のほうに……いっぱいカスが溜まってるわよお。ほんと、汚いわねえ」

そうしてペニスの横からべえと吐き出す舌先には、白いカスがへばりついているのだ。

「あ、あああっ……ご、ごめんなさいっ……」

お風呂に入ったときに性器はよく洗っているつもりだった。昨夜だって、そうだ。それなのに皮の中にはあんなに汚れがあっただなんて。湧き上がる羞恥に身体が熱くなる。

「んちゅ。……ふふ。しやうがないわね。ボクのキタナイおちんちん、私がお口でキレイキレイしてあげるわね。実験ってね？ 清潔さも大事なのよ」

恥じらう少年を悪戯っぽく見上げて——アニーの舌がさらなる性器の洗浄を始めた。

「れるろ、るろおっ……んちゆる、れるっ。にゆるれるろ」

「んふああっ!! ひ、はああんっッ」

柔らかな舌肉がペニスにねとりと密着して這い回る。舌先がぞりぞりと根本を抉^{えぐ}って、そこに堆積する少年の青い穢^{けが}れを剥ぎ取っていく。

「な、なめてっ……!! おちんちん、舐めっ……! ふああ、なめられてるうっ……!!」
まるで脳そのものを舐められているような刺激に腰が悶える。

女の人が——性器を舐める、なんて。そんなことをしてもいいのか。

「んにゅ、れにゆるう……。もう。こんなにチンカスを溜めるなんて、駄目な子ねえ」
けれどティムの細い脚に取りすがり、性器の洗浄を行う美貌に嫌悪の色はない。

「私の口のなか、あなたのカスでドロドロよお？」

そう言って彼女はももごとと頬袋を蠢かせて、また舌肉を見せつけてきた。

……ぶくぶくと泡の立つ唾液のなかに、白く濁った恥垢がなかば溶け崩れている。

——ああ、なんてキタナイのだろうか。

「んふふ」

と。アニーの舌が引っ込んで。——こくり、と喉が鳴った。

「ん。ふあ……。ティム君の熟成したカスチーズ……すっごい濃いわあ」
飲んだ。飲んだのだ。汚いおちんちんのカスを——。

「そ、そんなことっ！ アニーせんばいつ……」

「まったくもう。こくっ。わたしにこんな……ために溜めていたチンカスを味わわせるなんてっ……！ だめな、子ねえっ……ごく、んっ」

そうして「んべえ」と見せつける舌には恥垢の残滓ざんしはなく、少年の初々しいペニスはいくらうように真っ赤な皮膜をテカテカと輝かせているのだった。

「はい。おちんちん、綺麗になったわよお。これで会長が舐めてもダイジョーブ」
「~~~~~っ!!」

ぶんぶんぶん！ とマリナが激しく金髪を振って遺憾の意を示した。

「大丈夫。お手本を見せてあげるから……こうするの」

と、アニーはマリナへ顔を寄せ、指先で肉棒を摘み出すと——それへ舌肉を這わせるや、濃密に舐め始めたのだ。

「んちゅっ……。れるれるっ、ねるれるっ。ちゅ、ちゅ、くちゅく、にちゅ」

赤い髪が揺れて美貌が右へ左へと傾く。舌肉が三百六十度から男根を愛撫する。

「んくあっ……！ ふあ、ああっ……ああう」

大人っぽい女生徒が背の小さな少年の下半身に縋り付いている。たわわな乳房が服を揺らすくらいに、美貌を動かして、未熟な性器を美味しそうに舐め回している。

「ちゅるれるう……れちゅるりっ。ちゅっ、ちゅば……ちゅるれちゅっ……」

先つぽをチロチロと舐めて、膨らんだところをレロレロと撫で回す。かと思えば肉幹を唇で、横向きにくわえてクチュクチュしごいてくる。

「……………っ！ っ！」

ほんの間近で行われる淫猥なフェラチオに、マリナも目を離せないようだ。

「ちゅ、れるっ。ちゅるちゅ。はぷっ。にゅるれるうううっっ」

そんな生徒会長に、見せつけるような性器への舌愛撫は淫猥極まりない。

「ああうっ、ううーッ！ ひ、ひいんっ……………！ な、なにこれえっ……………！」

下腹がどんどん熱くなる。頭の中が痺れていく。身体がふわふわと、浮いてしまいそう。まるで、なにかに追いつめられていくような——その感覚は未知であった。

「なに、なんなんですか、これっ……………この、へんなの、へんなのおっ……………！」

「……………ん？ あらあ？ もしかしてティム君、オナニーもしたことないのお？」

「お……………オナニー？ な、なんですか、それっ……………」

ぐすぐすと、涙目になってアニーを見下ろす。

「……………あらあら。まさかここまで初心^{うぶ}だったなんてねえ。なあるほど、どうりで。これまで魔力の暴走が起きなかったわけだわあ」

彼女はなにかひとり、納得したように頷いていた。

「んふふっ。じゃあ、教えてあげるわあ。頭が熱いでしょ？ 下半身がふわふわして、

びりびりするでしょう？　それが、おちんちんがキモチイイってことなのよお」

「き、キモチっ……ふぁあんっ」

あつたかくてぎらぎらの舌肉が肉棒の表面を滑り、撫でる。その感触に背中がゾクゾクとして、股間にお湯を注がれていくように、キモチイイが溜まっていく。

「はあっ、ああっ、ああっ。これ……き、キモチ、いいっ……？」

頭の中がとろけていく。ああ——真っ白になっていく。

——ぱりいんっ。机の上に置いてあつた、花瓶が砕け散った。

「あ、え……？」

「ふふ。今は気にしないでいいの。キモチイイを感じていなさい。……ほおら、会長も。今みたいにするのよお？　もう、ほとんど裸じゃない……」

アニーに言われて、ようやく気付く。すでに下着まで溶け崩れ、素肌のほとんどを晒すマリナの姿に。健康的な両脚は畳まれたままだしたなくも開かれて、手は後ろに引き付けられ汗ばんだ脇も大きなおっぱいも丸見えだ。薄暗いダンジョンではなく、地上で陽光に照らされたその乳房は柔らかく艶めいて、ティムの脳をざわつかせた。

——ざくり。壁面にかかっていた絵画が、真っ二つに引き裂かれた。

ぬぼお、と、不意にアニーがその唇からペニスを解放する。

「……あ、へ。あへえ……？」



「せ、せせせつ……せんば、いつ……!」

剃っているのだろうか、彼女の髪と同じくらいの赤い陰毛は綺麗な逆三角を描いている。やがてその下に見えてくる秘所はすでにぬらりと濡れていて、ショーツにまで淫猥な粘り糸を引いていた。濃密な匂いが鼻腔を犯す。それはまるで熟成されたチーズのようで、頭の中がクラクラとしてきた。

「すぐく……いい、においが……」

「フフ。私は普段汗をかかないから。体温が上がると体臭も増えちゃうのよねえ」

なんて言いながら——右手と人差し指とであわいをぐばあ……と開く。

「どうかしらあ、ティム君？ わたしのここは？」

「……え、ええつと……その」

どう、と言われても。初めて見るのだから——。

（こ……これが……女のひとの、アソコっ……!）

開いた肉唇の内側にあるもう一枚の唇は、わずかに歪んでいた。色もまた桃色よりもほんのりと紫にくすんでいて、だがそれがひどく心を昂らせる。その、小陰唇の狭間に見える内臓は綺麗なパールピンクで、陰唇との対比がどこか卑猥であった。

「な、なんていうかつ……すぐく……エッチです。エッチすぎます。せんばいのアソコ」
「アニーのそこはひどく股間を疼かせる。むくむくと性器が膨らんでいく。強制的に剥か

れたせいでろうか、被っていた包皮が自然、亀頭の下まで剥けていく。

「おちんちん、ふつくらしちゃったわね。げんきのいいボクちゃんねえ」

笑いながらアニーがぐい、と艶めかしいヴァギナをティムへと押しつけてくる。長い脚を少しだけ曲げたがに股で、ちょうどティムの口のあたりにくるように、だ。

「ほおら……お舐めなさい」

——命じられる。

「あ……あ」

鼻腔を犯すメスの匂い。眼球を犯すメスの情景。それらに思考は奪われていく。そこが、普段はオシッコを出すために使っている器官なのだということも忘却して——。

「……れる。ぷちゅ……ちゅ。くちゅる……」

ヴァギナへと舌を這わせていた。ネレロネレロと、舐め上げていた。

「あつ……ふふ。そう、そうよう。いい子ねえ……」

ふるふるつとアニーが腰を震わせる。膣口からとろりと、粘液が滲み出す。少しだけ塩辛い。舌先にぴりりと痺れるような刺激がある。不思議な味の液体だった。

「んちゅっ……ちゅぱ。ちゅ……ちゅう、れちゅっ……」

「は、んっ……！ そんなに……一生懸命舐めちゃって。美味しいかしらあ？」

美味しい——というわけでもないのに。舌が止まらない。歪んだ内唇を舐めて、桃色の

膣口を舐める。そのたびに秘肉は蠢いて、いやらしい反応を見せてくれる。

「んんっ。あん……フフ、まるで犬みたいじゃない」

ときおり腰をひくくとはねさせながら、アニーは喜悦を浮かべてティムを見下ろす。首輪をはめた少年が股ぐらにあいけない顔を突っ込んで夢中になっている――。

「ああ……いいわぁ。とおつても、いいわ」

その情景が天才術士のなにかを刺激するのか、彼女は乳房を押し潰すように自らを掻き抱くと、もどかしげに腰を揺するのだ。

ぶちゅつぶちゅつとティムの顔に、アニーの股間がぶつかってくる。

「んぶっ……あぶぶっ！ んぶぶうっ……！」

鼻面に尿道がキスをして、ヴァギナのぬめりが唇を擦り上げる。もうまともに舐めてもいられずに、ティムは顔面への強制おま○こキッスに下腹を疼かせていた。

「も……もう。がまんできないわぁ……」

チヨコレートみたいな甘い声を漏らしてアニーはゆっくりと腰を降ろしていく。ティムの身体に沿うようにして、少年の股間へ、自らの股間を近づけていく。両脚が九十度近く外側へ折れ曲がり、はしたない「がに股」を描きながら下着はむしろ元通りにずりあがる。その下着の股間部分を彼女がぐいと横へずらして――ヴァギナは性器に密着した。

「あ、あぁっ……」

亀頭の先つぽに触れる、熱く濡れた肉の感触にティムは腰を震わせる。

「な……なに、を？　するんですか……これ……？」

「ふふ。大人の……とおっても、イイコトよ……」

熱の籠もった美貌が覗き込んでくる。

「で……でも。これ、なんだか……」

心がぞわぞわする。なにか——してはいけないことを、している気がする。

「んふふ。怖がりねえ。いいのよ。こんなの、みいんなしていることなんだから——」

「で、でもっ……」

「それに、ねえ……」

と——。アニーの視線が熱を増して、ティムの瞳を握め捕る。

「私、もう我慢できないの。ああ、あなたの魔力を注がれて、私の子宮がどうなるのか

——それを知りたくて、知りたくて、知りたくて、仕方がないのよ♥」

くぶり……と。肉唇が鈴口をくわえこんだ。

「だ、だめ、だめっ……入れちゃ、だめですうっ……！」

「ジタバタしないで、大人しく——私にれいぶ、されちゃいなさい」

そうして彼女は腰を落とす。膝が直角を超えて折れ曲がり、尻肉がたぶん、とティムの太股に衝突して——ぬふぬふぬふっ！

「う、ああ……！ は、はいっちゃったあ……!!」

ティムの性器はアニーのヴァギナへと呑み込まれてしまったのだ。

「ええ……。入っちゃったわよ。ティム君のおちんちん。私のおま○こに……」

膣孔に皮が剥かれて熱くどろどろとした膣肉が直接ペニスに抱きついてくる。敏感な海綿体を包み込む贅肉の、ざわざわとした感触が鮮明で刺激的だ。

「うふふう。ティム君のどーてい、れいぷで奪っちゃったわあ♥」

淫らに、笑い——アニーはぎゅうとティムを抱きしめた。

「あ、……ああう、なかっ……!! これ、せんばいの、おちんちんのなかっ……!!」

熱い肉悦が脳内にドロドロと溢れ出す。奇妙に覚えた罪悪感を押し流していく。

精一杯に背伸びをするペニスが膣内でびくびくと痙攣し、我慢汁をドパドパ垂らす。

「うふふ……。わりやりされてるのに、もう気持ちよくなっちゃってるの?」

楽しげにアニーは制服の前を捲り上げる。ショーツとお揃いの、黒いブラジャーが現れて、それも一緒くたに乳房の上へと引き上げてしまう。

ぶるんっ……ぶるるるんっ!

「ふ、あ、あっ……。お、おっぱいっ……」

それはこぼれ落ちるように、重く揺れながら晒し出されたのだ。

マリナのおっぱいよりも少しだけ小さいかもしれない。けれどとても柔らかそうだ。マ



「わたくしに甘えなさいな、ティム・エーレンベルグ。女の人怖くないって、わたくしが優しく教えてあげますわ♥」

顔面が柔らかくて暖かくてずしりとしたものに包まれている。表面は滑らかでしつとりと汗ばんでいて、ミルクみたいな匂いを放つ素敵な塊だ。

ダンジョンで初めて目にして、生徒会室でまじまじと眺めたマリナのおっぱいだ。

それが今——顔面に覆い被さっていた。左のおっぱいが顔で潰れて、右のおっぱいは顎のあたりを包み込んでいる。

どくん、どくと音がする。乳肉を伝わって、彼女の鼓動が聞こえてきた。

（なんだろう……なんだかこれ、すっごく安心する……）

身体の全部をおっぱいに包まれているような、そんな錯覚すら覚える。

「いっぱい甘えていいのですわよ、ティム？ 女の方は怖くありませんのよ」
「ぼ、ぼく……」

こうやってマリナに抱きしめられて柔らかかなものを押し当てられていると——脳裏に焼きついていた錬金術士のそら恐ろしい面貌が消えていく気がした。どうやら心の奥底にアニーへの、あるいは女の人への苦手意識が芽生え始めていたらしい。

けれどマリナの胸に顔を埋めると安心するのだ。彼女が身動きをして、頬や鼻梁の隙間を埋めるようにみっちり乳肌が吸い付く。ともすれば息もできなくなりそう。

ひどく——懐かしい気がする。

そう、これは遠い昔。お母さんの腕に抱かれて、そのおっぱいを——。

「あんっ」

とマリナの肩がはねる。いつの間にかティムの唇が、彼女の乳首に吸い付いていたのだ。「あっ……！ ご、ごめんなさいっ……」

慌てて口を離す。……彼女は善意でこんな恥ずかしいことをしているのに、その乳房を唾液で穢してしまった。なんてく、図々しいことをしてしまったんだ。

あまりの情けなさに顔を真っ赤にして泣きそうになる、そんな少年へと。

「いいえ。その……。わ、わたくしも。あなたに……同じようなことをしてしまいましたから。その罪滅ぼしですわ。いっっぱい、お吸いなさいな。はい……どうぞ」

マリナは豊かな乳房を揺らして、その乳頭をティムの唇へ押しつけてくれるのだ。

「……あ、う……」

おずおずと……けれど抗いがたい魅力に誘われて少年はその桃色突起を口に含んだ。

「あ、ん……」吸われた方の瞳を細めたマリナが細かい吐息を漏らして、すると少年の口の中で、柔らかかった乳頭がむくむくと膨らんでいく。

まるでそれをぞんぶんに味わいなさいとでもいうかのように。

「ん……ちゅむ、ちゅ……」

吸い付いた乳首を唇の内側で撫でてみる。少し固めの感触が心地いい。

「そう、そうですね。もっとわたくしのおっぱいに甘えていいのですわよ」

マリナの言葉に誘われて乳首をちゅばちゅばと吸い上げる。口の中に乳頭と乳肉の一部を含んで、それを唾液まみれにしながら舌を押しつけ舐めてみる。

「んあっ……んっ。は、あっ……んあっ……」

マリナが小さく肩をうねらせて甘い吐息を漏らす。その顔が桃色に染まっていく。

乳肌は甘くとろけるようで、彼女の身動きに合わせて顔のかたちへむにゅむにゅと潰れていく。その柔らかさはまるで、顔と乳房とが一体化していくかのように。

（おっぱい……おっぱい……女のひとの、おっぱい……）

ちゅう、ちゅう。ちゅばちゅうちゅばと、吸い上げる口が止まらない。

固くなった先つぽをレロレロと舐めてそれを味わうのを止められない。

——赤ちゃんみたいにだっこされて。赤ちゃんみたいにおっぱいに吸い付いて。

それはもう、はたから見ればとつても情けない姿だろう。

「ちゅ、ちゅれるっ……れる、ちゅ、ちゅばっ……」

「は、あっ……ふあ。ふふ、かわいいっ……。一生懸命に、おっぱいに吸い付いています

わねっ……。赤ちゃんみたい。わたくしのおっぱい、美味しいですか？」

ちゅうちゅうと乳房を吸いながら……こくり、と頷いていた。

「フフ。嬉しいですわ。ああ、可愛い可愛いティム。お姉ちゃんのおっぱいに、たっつぷりと甘えなさいな」

と、彼女は右の乳房もティムの顔へと押しつけてくる。左の乳房を口から離して、今度はそちらをちゅぱちゅぱと、吸って舐めると甘えてしまう。

「んっ、あんっ……。フフ。ほんとうに赤ちゃんみたいですわ。……あら」

と。マリナの目が少年の股間へと吸い付く。

「ここが膨らんじやって……苦しそうになってきていますわよ？」

彼女の手が股間に触れて、ティムは「んう」と腰を震わせる。

「ほら、今、解放してあげますわ……」

——ドキドキと。高まる鼓動が身体中に響いている。それは自身の鼓動か、あるいは？ 半ズボンの前ボタンが外されていく。ブリーフを、押し下げられる。

「ああ。もう。やっぱり、あなたはここも可愛いですわね……」

なにかたまらないものを前にして必死に感情を押し殺すようなマリナの声である。

亀頭以外は包皮を被ったままの、成人男性の親指ほどの肉棒がマリナの眼前にて健気に勃起している。彼女はそれをキラキラとした瞳で見つめて、ごくり、と唾を呑み込んだ。

「アニーにこれを、いっぱい苛められたのでしょうか？ ……かわいそうに。わたくしが慰めてさしあげますわ。この……お、おちんちんにも。怖くないって教えてあげますわ」

——滑らかな感触が性器を包み込む。

「ううつ」とティムは腰をヒクつかせて、乳房の隙間から股間を見やる。

……マリナの指だ。彼女の、白魚のような指がペニスを抱きしめているのだ。

（な……なにを。また……ぼくの、おちんちんに……なにされるんだろう……）

なんだかみんな、性器を狙っている気がする。わずかな不安に身を固くするティムへ。

「怯えなくとも良いですわ。わたくしのおっぱいに甘えていなさい」

彼女は少しだけ肩を落として、なおさらに乳房を押しつけてきた。そうしながら、これ物を扱うように柔らかく包み込んだ手の平を上下へと揺り動かしていく。

「う、うあつ……んぶうつ……」

素手の指はしつとりとペニスに吸い付くようで、それが肉の皮を引きずりながらすりっすりつと甘く上下に撫でていく。ぞわぞわつ、と、悪寒にも似た悦感が背筋を這い上がり、少年はぶるりと背筋を震わせた。

「ど、どうですか？ オトコノコはこうされるとキモチイイのでしょうか？」

ペニスを他者に触れられる、その感触にはなんとも言えぬ違和感がある。海綿体を包み込む肉皮がずるりつ、と剥かれて、痺れに似た刺激が性器に襲いかかってきた。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！



二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！



二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！



リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラソベ！



あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!